

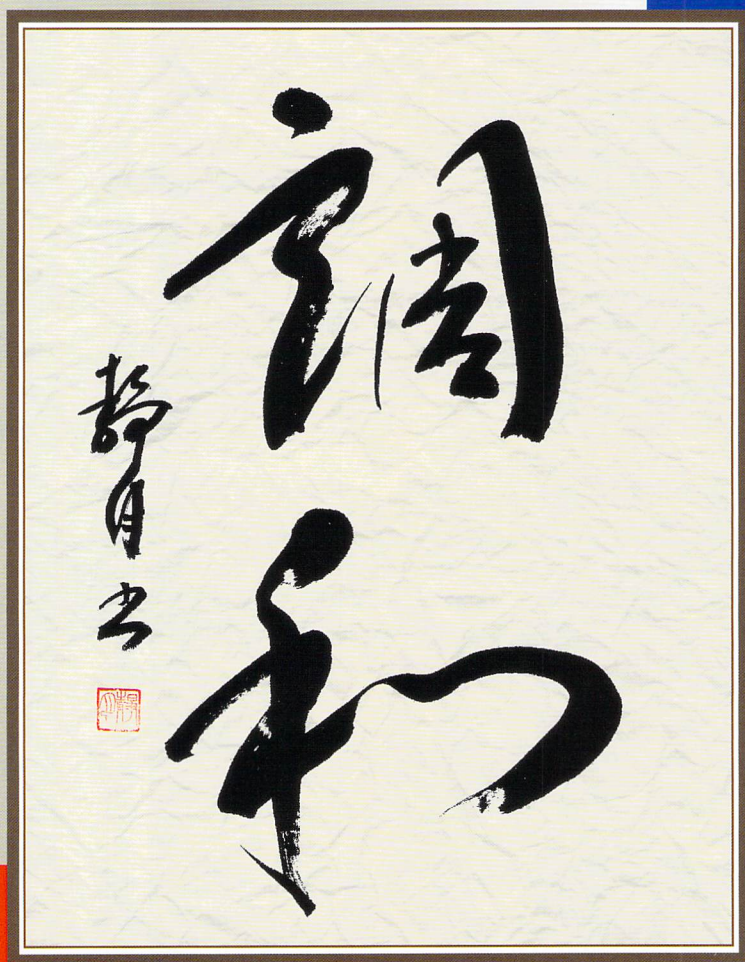
TOKYO
KODAIRA-CITY
ORCHESTRA



東京コダイラ・シティ管弦楽団

●指揮 新田 敏則 ●クラリネット 川村 慎敬

第3回 演奏会



2013 **4.28** (日) 午後2時開演
小平市民文化会館 [ルネこだいら] 大ホール

主催／東京コダイラ・シティ管弦楽団 共催／東京コダイラ・シティ管弦楽団後援会
後援／小平市 東久留米市 小平市教育委員会 清瀬市教育委員会 西東京市教育委員会 東村山市教育委員会
小平商工会 小平市職員組合 FM西東京 KEI音楽学院 メルセデス・ベンツクラブ107

ごあいさつ

本日のご来場、ありがとうございます。
演奏者共々、心からお礼申し上げます。

2011年4月、大震災の年に始まった東京コダイラ・シティ管弦楽団の演奏会も、お蔭さまで今年で3回目を迎えることが出来ました。言い古された言葉?に、「石の上にも3年」という表現がございますが、内に向かっては表紙の揮毫「調和」のもたす意味の通り、アンサンブル(合奏力)の更なる向上と組織の充実に努めると共に、外に向かってはオーケストラの存在、実力を認めてもらう努力を行い、様々な演奏を皆様にご提供できる機会を広げたいと考えています。

3年目の活動に入った今回の演奏会が、「新世界」などが演奏された前回に勝るとも劣らぬ「何か」を生み出せれば、先の言葉の意味を物にする切っ掛けになるのではないかと思います。演奏に臨みたいと思います。文末になりますが、この1年の皆様のご多幸を祈念申し上げます。(新田敏則)



指揮者 新田敏則 プロフィール

1947年、岩手県釜石市に生まれる。
岩手県立釜石南高等学校卒業後、国立音楽大学器楽科(クラリネット専攻)に進み、大橋幸夫、小笠原長孝の両氏に師事。同大学卒業後、指揮法を金子登氏に師事。

1973年、日本フィルハーモニー交響楽団でブラームスの交響曲第1番他を指揮してデビュー・コンサートを行い、翌年フランス、パリに渡る。パリでフランス国立管弦楽団の指揮者、ジャン・マルティノン氏に師事。2年間研鑽を積む。

帰国後は東京交響楽団、東京佼成ウィンドオーケストラ、シエナ・ウィンドオーケストラなどを指揮。

1995年にはイスラエル・フィルハーモニー・ウィンドアンサンブルに招かれ、モーツァルトの「グラン・パルティータ」他を指揮、97年には東京で再演され、そのライブCDがリリースされている。

活動の中心はフランスから帰国直後に結成された現、東京多摩交響楽団で35年を越す活動歴を数えるが、指揮者個人がこのような長期間オーケストラを維持して活動している例は、日本では極めて稀と推測される。

小平市民文化会館完成以前の1987年12月から年4回、20数回行われた「小平交響楽団」のコンサートは多くの小平市民に親しまれたが、今回の「東京コダイラ・シティ管弦楽団」は活動の拠点である小平市民文化会館に合わせた拡大版で、東京多摩交響楽団のメンバーを一新して構成されたものである。

クルト・マズア、ズービン・メータ両氏にも、現地(ニューヨーク、イスラエル)で指導、アドヴァイスを受けている。



クラリネット／川村 慎敬

東京都出身。高校からクラリネットを始める。国立音楽大学器楽科クラリネット専攻を卒業。東京都新人演奏会に出演。在学中から東京交響楽団、東京フィルハーモニー管弦楽団にアシスタントとして招かれ参加。卒業後は、協奏曲のソリスト、オーケストラや吹奏楽を中心に多岐に渡る活動を行う傍ら、20団体を超えるアマチュアオーケストラや吹奏楽団体を指導している。

クラリネットを佐川聖二、生島繁の両氏に師事。東京コダイラ・シティ管弦楽団、東京多摩交響楽団ではソロ・クラリネットとインスペクターを務めている。

KEI音楽学院クラリネット科講師。

Program

交響曲第8番口短調「未完成」D.759……F.シューベルト

第1楽章 Allegro moderato(ほどほどに速く)

第2楽章 Andante con moto(動きをもってゆっくりと)

クラリネット協奏曲イ長調 K.622……W.A.モーツァルト

第1楽章 Allegro(速く) 第2楽章 Adagio(ゆっくりと) 第3楽章 Rondo Allegro(速く)

—休憩20分—

交響曲第5番ハ短調「運命」Op.67……L.v.ベートーヴェン

第1楽章 Allegro con brio(生き生きと速く)

第2楽章 Andante con moto(動きをもってゆっくりと)

第3楽章 Allegro(速く) 第4楽章 Allegro(速く)

演奏曲について——新田敏則

※ 交響曲第8番短調「未完成」D.759

通常、芸術家の未完成作品は遺作を意味する場合が多い。

しかし、シューベルトはこの「未完成」の後に、長大なハ長調の交響曲「グレート」が作曲されていることから何故未完に終わったか、様々な憶測がなされて来た。実際には、2つの楽章がどちらも歌謡風の主題で出来ているなど変化に乏しいため、次の第3楽章に手を加えた段階で、完成を諦めたのではないかとという説が一般的なようだ。

因みに、ある作曲家による「未完成」の完成版も出ているが、何か言い様がない違和感が感じられるためか、ほとんど普及することはない。

尚、シューベルトの交響曲は未完成を含めて8曲あるが、当初は7番が欠けた状態で9番まで表記されていた。現在では整理され、未完成を7番、先のハ長調を8番として表記することが一般的だが、今回は敢えて旧来の「8番」として表記している。

第1楽章は低弦の祈のような序奏の後、ヴァイオリンの小刻みで囁くような音型の上に、短調ではあるが優しく甘美な主題がオーボエとクラリネットで奏される。もう一つの主題はシンコペーションのリズムに乗ってチェロ、続いてヴァイオリンによりハ長調で奏される。第2楽章はピチカートで奏されるコントラバスの上昇する音階と、同時進行で奏されるホルンとファゴットの和声進行の2小節の序奏の後、弦楽器で主題が提示される。第2主題は弦楽器のシンコペーションに乗って哀愁的な旋律がクラリネットで奏される。終わり部分では、初めの主題の一部に呼応する音型が楽器を代えて名残惜しそうに繰り返され、静かに終わる。

※ クラリネット協奏曲イ長調K.622

モーツァルトは1791年12月ウィーンで亡くなっているが、この作品の完成はその死の2ヶ月前に完成されたもので、彼の「白鳥の歌」とも言われている。

演奏時間が優に30分を超す大作で、クラリネットの音色に魅せられたモーツァルトが、この楽器の魅力を余すところ無く引き出した名曲になっている。

第1楽章は古典協奏曲の定石どおり、オーケストラによるひと通り主題提示が行われた後、独奏クラリネットが現れる。第2楽章はゆったりとしたテンポできわめて美しく奏される。形式的にはABAの3部形式で、Bの部分ではクラリネットに細かい動きが見られる。第3楽章は速い6/8拍子(2拍子)のロンド形式。主題が繰り返し現れる形式で、大変技巧的な楽章になっている。

全体として言えることは、独奏クラリネットが低音域から高音域までを駆使し、陰に陽に自在に活躍することだろうか？

尚、ここで使用されるクラリネットは通常のもの(変ロ長調)より半音低いイ長調のもので、より深みのある柔らかい音色が特徴である。

※ 交響曲第5番ハ短調「運命」Op.67

恐らく、あらゆる管弦楽作品の中で最も良く知られている名曲ではないだろうか？又、その構成も群を抜いていて、古今の交響曲の最高傑作と称される所以になっている。

「運命」という表題は、作曲家自身が弟子のシントラーに、「運命はこのように戸を叩く!」と語ったことに由来するが、欧米ではこの表題はほとんど使用されず、日本独自のものである。

全4楽章で、第1楽章はハ短調で提示される馴染みの主題と、ホルンの強奏(f)の後にヴァイオリンと木管楽器で奏される先の主題とは対照的な主題、2つで構成されるソナタ形式で出来ている。第2楽章は自由な変奏曲の形を取っているが、冒頭でヴィオラとチェロにより主題が奏され、2つの変奏部分を経て、ヴァイオリンが主題を奏し木管楽器が追奏する3番目の変奏で高潮に達して終わる。第3楽章はスケルツォ(1小節を1拍子で速く奏される)で、低弦により奏される主題と、ホルンの強奏で提示される主題との2つで構成される。トリオ(中間部)はチェロとコントラバスの物々しさを感じる主題で構成され、冒頭に戻る。ここでの新たな試みは、次の第4楽章に切れ目無く続けられることである。これが、「苦悩を通じて勝利へ!」と語ったと言われる、勝利を象徴する第4楽章の主題提示をより効果的に演出している。コーダ(結び)は120小節を超す長大なもので熱狂の内に終わる重要な役目を果たしている。

演奏者の紹介

フルート／後藤玲子

Flute

岩手県出身。国立音楽大学器楽科フルート専攻卒業。卒業と同時にソロコンサートの他、室内楽、オーケストラと共に全国で演奏活動を展開。数回のリサイタルも開催。フルートアンサンブル、歌やコーラスのバックバンドのメンバーとして、コンサート、ライブ、CD録音等で活躍。グアテマラ大使館、ボリビア大使館の後援チャリティーコンサート、パーティーに毎年出演するなど、さまざまなコンサートに出演している。

宮本明恭氏、佐藤正淳氏に師事。指揮者の新田氏と同じ釜石市の出身で、中学、高校の後輩であるため、彼の指揮するオーケストラへの参加は大分長くなっている。吉祥寺ミュージックアカデミー、国立音楽センター講師。



ヴァイオリン／福本 牧

Violin

東京都出身。国立音楽大学附属高校を経て国立音楽大学ヴァイオリン専攻卒業。在学中、スイス・アローザ国際音楽祭などに参加。ハイドンやヴァンハルのヴァイオリン協奏曲を演奏。(後者は世界初演奏ライブ録音)特にヴァンハルの作品では多くのCD録音、演奏会を行っている。最近では邦人作曲家の作品をプログラムに取り入れた演奏も行っている他、お箏奏者の衣袋聖志と結成したDuo和響(なごみきょう)では、和楽器と洋楽器の組み合わせにより生まれる新しい音楽の可能性を追求している。

又、数団体のオーケストラのコンサートマスターなどとしても活動しているが、東京コダイヤ・シティ管弦楽団では第2ヴァイオリンの首席奏者、監事としてオーケストラを支えている。



◎表紙の揮毫(書)について

今回も岩手県大船渡市の著名な女流書道家、津田静月さんから寄せられたものを使用させて頂きました。「調和」はハーモニーという言葉に置き換えられますが、音楽では重要な意味を持つ言葉でもあります。ハーモニーの良否はその演奏団体のレベルにも例えられますので、3回目を迎えた今回に相応しい言葉だと思いますが、同時に、更なるハーモニーの向上(レベル・アップ)を託された思いを致しております。(新田)